

Joyce Carol Oates の  
“Where Are You Going, Where Have You Been?”  
Connie のゴシック的「他者」Arnold

神 崎 ゆかり

Joyce Carol Oates’s “Where Are You Going, Where Have You Been?”:  
Arnold as Connie’s Gothic “Other Self”

KANZAKI Yukari

**Abstract**

Joyce Carol Oates’s (1938-) “Where Are You Going, Where Have You Been?” is one of the outstanding modern Gothic stories. It first appeared in *Epoch* in 1966 and was later included in Oates’s anthology of short stories, *The Wheel of Love* (1970). Walter Sullivan calls this story “an interlude of terror,” as it does not directly depict such horrible scenes as rape and murder typical in the-18th-century classical Gothic novels. However, it makes the readers believe that a 15-year-old protagonist Connie is surely going to be the victim of the diabolical Arnold Friend, who is not her friend at all but an incarnation of the Devil.

G. J. Weinberger argues that Arnold is Connie’s “other self” representing not only her “mythic, irrational side ... but also a cluster of insights into the violence and sexuality of adulthood” and emphasizes that this is the story of Connie’s initiation. Weinberger’s analysis is insightful and persuasive, but there still remain some unsolved questions as to why the entire story is dominated by an atmosphere of vanity and Connie’s death-wish. This paper, therefore, demonstrates that Arnold Friend is Connie’s Gothic “Other Self,” which represents her irrational and destructive impulses to overthrow the conventional ideas and vanity of everyday life which are shared by people in America in the 1960s.

**Keywords:** Oates, Gothic, Terror, Other Self, 1960s

オーツ, ゴシック, 恐怖, 他者, 1960年代

## はじめに

アメリカの女流作家 Joyce Carol Oates (1938-) の短編 “Where Are You Going, Where Have You Been?” は、現代ゴシックを代表する作品のひとつである。1966年に *Epoch* 誌で発表されたのち *The Wheel of Love* (1970) に収録されたが、それ以来しばしばテキストや選集に取り上げられたため、1974年にOates自身が *Where Are You Going, Where Have You Been?: Stories of Young America* というタイトルの短編集に組み直した。

この作品は、Walter Sullivan が “an interlude of terror” (77) と紹介しているように、レイプや殺害が確実に行われることを予想させる恐怖に満ちているものの、物語の最後までゴシック特有の残酷な場面はいっさい描かれていない。したがって、ゴシック小説の定番である18世紀のおどろおどろしい作品群を連想するならば、この作品をゴシックと分類することに疑問を感じる読者もいるのではないだろうか。

しかし、そもそも文学における「ゴシック」というジャンルは、「恐怖を掻き立てる作品」という以外、正確に定義することはほとんど不可能といっても過言ではない。ただ、どのような定義をしようと、そこに「他者」(Otherness) の概念が含まれることは多くの研究者が認めるところである (Martin vii, Williams 19-20)。

「他者」という概念が特に注目されるようになったのは、20世紀の精神分析批評の功績によるところが大きい。しかし、Anne Williams が指摘しているように、「他者」はゴシック小説の創始者 Horace Walpole (1717-97) によってすでに意識されていた。彼が *The Castle of Otranto* (1764) の出版翌年に、第2版の副題として “A Gothic Story” を採用したとき、その特性として考えた「中世の、野蛮な」ものは、「洗練され、文明化した」ものに対する「他者」であった (20)。すなわちゴシック小説は、その出発点から「他者」と向き合ってきたのである。ただし、初期の作品にうかがえる「他者」は、たとえば西欧近代の啓蒙思想による理性と合理主義を肯定する社会の規範からはずれる原理やイデオロギーを具現する他者、すなわち外在的な他者であった。社会から異端視された「他者」は、当然のことながら「悪の相貌をもって登場せざるをえない」し、また「日常的世界では常に不在」であるため、悪魔や悪鬼、幽霊や怪物といった姿をあてがわれることになる (神尾 13)。

ところが、19世紀になりロマン派などの影響もあって人間の内面に目が向けられるようになると、ゴシック小説の外在的な他者は個人の無意識の具現としての内在的な他者へと

移行していく。そのことを明言したゴシック作家は Edgar Allan Poe (1809-49) である。Poe は、最初の短編集 *Tales of the Grotesque and Arabesque* (1839-40) の序文で、「私の作品はよく恐怖をテーマにしているが、恐怖は (中略) 人間の魂から生じるものだ。私は恐怖をその源である魂から導き出して、しかるべき結末へと駆り立てただけだ」と主張している (612)。Poe以降、ゴシック小説の「探求はたんに思わせぶりな謎の解決にあるのではなく、神秘的な人間の内奥へ向かっていく」ものが多くなる (神尾 139-40)。この伝統を受け継ぐ作家の系譜にJoyce Carol Oatesは位置づけられる。Poeや Oatesが描く無意識の具現としての「他者」も言うまでもなく悪の様相を帯びている。なぜなら、抑圧され無意識の領域に閉じこめられているのは、理性的、意識的自我が否定する欲望や感情や衝動だからである。

そこで、Oatesの “Where Are You Going, Where Have You Been?” を「他者」の視点から分析することによって、そのゴシック性を考えたい。

## I

“Where Are You Going, Where Have You Been?” の主人公は、Connieという15歳の少女である。両親と姉の June そして彼女自身の4人からなるごく一般的な中流家庭の娘で、唯一の楽しみは女友だちとショッピングプラザをぶらつき、映画を観たり、ボーイフレンドと遊ぶことである。物語の前半部分は日常のリアリスティックな描写で、取り立てて恐怖は感じられない。ところが、ある日曜日に一人で留守番をしている Connieのもとに、Arnold Friendという得体の知れない不気味な男がやってくることによって状況が一変する。スクリーンドア一枚を隔ててConnieとArnoldが対峙する場面では、時間が経つにつれて高まる恐怖がひしひしと伝わってくる。Arnoldは彼女を巧みに誘い出そうとするが、一歩踏み出した先には彼によるレイプと殺害が待っていることは明白である。にもかかわらず、「こっちにお出で」という言葉に吸い寄せられるように彼女が出ていく場面で物語は終わる。

古典ゴシック小説で、城や地下牢といった閉所でヒロインが悪の脅威に晒されるように、Connieは家という閉じられた空間でArnoldに怯えている。次第に威圧的になるArnoldは悪魔的存在である。悪魔といえば、その代表はMiltonのサタンであるが、Arnold Friendという名前に「大悪魔」(Arch Fiend)を重ねて読む研究者がいるのも彼の悪魔的性質ゆえである (Wegs 90)。彼は、家族から女友だち、さらには近所の女性の死に至るまでConnieに関するすべてを超人的に熟知している。また、悪魔は醜さと同時に人を惹きつ

ける魅力も兼ね備えているものだが、Arnoldも、かつらをかぶったような頭で、背を高くみせるためブーツに詰め物をしているため転びそうになったりと滑稽に見える反面、筋肉質の身体で Connie を性的に魅了する。Connie になれなれしく話しかけているかと思えば、車で待つ連れの Ellie に “Don’t crawl under my fence, don’t squeeze in my chipmunk hole, don’t sniff my glue, suck my popsicle, keep your own greasy fingers on yourself!” (133)<sup>1)</sup> とぞんざいで、その行動は予見し難く、また「狂暴で脅迫的、ときには射るようなまなざしをもつ悪魔」のようである (Roberts 113)。

彼は、自ら家に侵入することはない。とは言え Connie が家の中に留まることも許さない。彼女が電話で助けを求めるのを阻止し、家に火をつけると脅かす。恐怖と絶望の虜になった Connie は、身体も心も麻痺した状態になり、 “I’m not going to see my mother again . . . I’m not going to sleep in my bed again.” (134) と知りながらも、Arnold のもとに向かって行く。そこで彼女を待つのは「死」である。

この話は、雑誌 *Life* (1966年3月) で報じられたアメリカのアリゾナ州トゥーソンで実際に起こったカリスマ的殺人鬼による連続殺人事件をもとにしている。これは、Charles Schmid という男が、Alleen Rowe という15歳の少女を家から誘い出して殺したあと、17歳の Gretchen Fritz と13歳の Wendy Fritz という姉妹も同様の手口で殺害した事件である。彼もまた彼女たちを強引に連れ去ったのではなく、巧みに誘い出したのだが、その手口から「トゥーソンの笛吹男」(“Pied Piper of Tucson”) と呼ばれていた。Schmid は少女たちが憧れるようなハンサムな男ではなく、背が低くそれをごまかすために靴に詰め物をしていて。その上、髪を真っ黒に染め、顔にはおしろいやマスカラ、リップクリームで化粧もしていたという (Quirk 413-19)。物語の Arnold が Schmid をモデルにしていることは明らかであるが、この事件でも謎は、思春期の少女が Schmid のような不気味な男についていったことである。Oates の作品もこの点に焦点を合わせている。

## II

そこで問題とすべきは、Arnold であろう。Connie にとっても謎である悪魔的存在の Arnold は、彼女の無意識を象徴するゴシック的「他者」(Other Self) と考えられる。これに関する先行研究の代表的なものとしては、G. J. Weinberger の “Who Is Arnold Friend? The Other Self in Joyce Carol Oates’s ‘Where Are You Going, Where Have

1) Joyce Carol Oates, *Where Are You Going, Where Have You Been?: Selected Early Stories* (Princeton: Ontario Review P, 1994). 以下、この作品の引用はすべてこれに依る。

Joyce Carol Oates の “Where Are You Going, Where Have You Been?” Connie のゴシック的「他者」Arnold (神崎ゆかり)

You Been?” があげられる。Weinberger はこの作品が, Poeの “William Wilson”, Melvilleの “Bartleby”, Crane の “The Bride Comes to Yellow Sky” そしてConrad の “The Secret Sharer” などと同様, 「分身物語」(Doppelgänger stories)であるとして(207), Arnold を Connie の「現実離れした非理性的な一面と同時に, 暴力や大人の性に対する目覚めを象徴」する「他者」と考えている (205)。

そのことを立証するにあたり, Weinberger は Connie がショッピングプラザで Eddie というボーイフレンドと彼の車に向かう途中の出来事に言及する。バックミュージックのように聞こえてくる音楽に酔いしれながら歩いていくとき, 彼女は “. . . happened to glance at a face just a few feet from hers. It was a boy with shaggy black hair, in a convertible jalopy painted gold.” (120-21) と, ある男の子に目を奪われる。このとき見かけた男の子の “shaggy black hair” と彼が乗っていた “a convertible jalopy painted gold”, それにレストランの屋根で回転しているハンバーガーを掲げた “a grinning boy” の少年像がArnoldのイメージと一致することから, Connie が目にしたこのような光景が, Arnoldという架空の人物を生み出すきっかけになったという (207)。

確かに Weinberger が指摘しているように, Arnold が Connie の幻影であるという解釈は彼が登場する直前の次の描写から可能である。

Connie sat with her eyes closed in the sun, dreaming and dazed with the warmth about her as if this were a kind of love, the caresses of love, and her mind slipped over onto thoughts of the boy she had been with the night before . . . when she opened her eyes she hardly knew where she was . . . . She shook her head as if to get awake. (122)

Arnoldの訪問は, Connie がうたた寝をしながらショッピングプラザで見かけた男の子に思いを巡らせていた直後である。したがって, これ以降の出来事は夢かうつつか極めて曖昧である。上の引用にある “. . . when she opened her eyes she hardly knew where she was . . . . She shook her head as if to get awake.” の部分は, あえてどちらともとれる書き方になっている。Weinberger は Arnold の存在をはっきりと否定している。

Arnold Friend does not exist . . . . “He” is simply Connie’s projected other self, depicted in Oates’s way, with a heavy emphasis on evil, violence, and the threat of rape (if not death) which Connie must acknowledge . . . . The cost of refusal is

failure to attain adulthood, as illustrated by the twenty-four-year-old June who works as a school secretary, still lives at home, and who obediently, and inappropriately dressed, goes to the family barbecue. (207-08)

Weinbergerによると、Arnoldは大人の世界の暴力や性を具現したもので、Connieはそれに対し不安や恐怖を抱いている。彼が彼女のことを何でも知っているのは、まさに「彼は彼女」(212) すなわちもう一人の自己(分身)だからである。Arnoldが男性で、18歳とっているが実年齢は30歳ぐらいであるというのは、彼女の異性と大人への目覚めを象徴するものであり、その恐怖に怯えつつも家を出ていくのは、家という守られた環境からの旅立ちである。このように分析するWeinbergerは冒頭で、Arnoldが象徴するのはConnieの「現実離れした非理性的な一面」であることに触れてはいるが、それを敷衍することはなくこの物語は思春期のConnieが自らの「他者」と直面することで、彼女の内部で成長しつつある大人に向かって一步踏み出そうとしている「イニシエーション」物語であると結論づけている(210-12)。

### III

Weinbergerの「他者」説は洞察力に富み、その分析の細部はArnoldがConnieの「他者」であることを見事に証明している。また「イニシエーション」物語としての解釈そのものに異論を挟むものではない。しかし今ひとつ釈然としないのは、アリゾナの事件に触発されて書かれたこの物語には「死」のイメージが拭いきれない点である。なぜなら、ConnieがArnoldの誘いに応じることは、Schmidという殺人鬼について行った少女たちの「死」という結末を暗示するからである。もちろん大人になることはこれまでの自己を葬ることであると同時に「死」に一步近づくことではあるが、「死」以外にも、Connieの家族の無関心と空虚な生活、そして彼女の破壊的なまでの自暴自棄といった、作品前半を支配するムードが十分に説明できないように思われる。「イニシエーション」物語にもこのような感情は当然ある。しかし、一般的にそれらは肯定的な成長への過程とみなされるが、この物語の場合はひたすら否定的な結末に向かっている。彼女が大人になっても、現状を打破できるような生活が待っているわけではない。すなわち、物語を支配するConnieの虚無感と「死」を志向する行為が解決できない。

Connieはすでに述べたように、ごく一般的な中流家庭の娘である。しかし、母親は家族のために尽くす1950年代に理想とされたような母親としてはもはや描かれていない(小

Joyce Carol Oates の “Where Are You Going, Where Have You Been?” Connie のゴシック的「他者」Arnold (神崎ゆかり)

田他 873-74)。少なくとも Connie の目には、美しくなっていく娘に嫉妬しながら、鏡を通して若く美しかった頃の幻影 (a shadowy vision of herself, 118) を追い求めている残骸のような存在である。ことあるごとに姉の June と比べては小言をいう母親に Connie は抑圧され、嫌悪感を抱くようになっている。

Her mother . . . always scolded Connie about it. “Stop gawking at yourself. Who are you? You think you’re so pretty?” she would say. Connie would raise her eyebrows at these familiar old complaints . . . now her looks were gone and that was why she was always after Connie.

“Why don’t you keep your room clean like your sister? How’ve you got your hair fixed—what the hell stinks? Hair spray? You don’t see your sister using that junk.” (118)

9歳年上の姉は母親や叔母たちに気に入られているが、Connieには “so plain and chunky and steady” (119) でまったく魅力のない女性としかうつらない。彼女は周りが何といおうと、美しい自分の方が姉に勝っていると信じている。しっかり貯金をして家事を手伝う姉といつも比較され、うんざりしている Connie はくだらない夢想 (trashy daydreams, 119) にふけり、ついには “. . . wished her mother was dead and she herself was dead and it was all over” (119) と自暴自棄に陥っている。

女友だちの父親に車で送ってもらって、短パンに、平底のバレリーナのような靴を履き、腕にチャームをつけたブレスレットをちゃらちゃら鳴らしながらショッピングプラザをぶらついて遊ぶのが彼女の楽しみであるが、心の底から楽しんでいるとも思われない。午後11時になると作品のタイトルにあるように「どこに行ってたの」とも、「何をしたの」とも訊くことのない女友だちの父親に、再び送ってもらうのだ。Connie の父親も妻や娘たちの行動にまったく無関心である。

Their father was away at work most of the time and when he came home he wanted supper and he read the newspaper at supper and after supper he went to bed. He didn’t bother talking much to them . . . (119)

手本となるべき人物がいるわけでも、明確な夢や目的があるわけでもない Connie は、惰性的に音楽のリズムに酔いしれ、虚無的な生活を送っている。ここで Oates は、

Connie の二面性、つまり惰性的な日常や慣習を重んじる両親や姉の価値観に引きずられている一面と、それに反発を感じている一面を対照させている。

She wore a pull-over jersey blouse that looked one way when she was at home and another way when she was away from home. Everything about her had two sides to it, one for home and one for anywhere that was not home: (119)

彼女の家庭、それを包み込む家は、安全な場所ではあるが生の躍動や興奮が感じられない。Connie は家族の価値観を否定しつつも、それを超える機会や場所を得られない自分に苛立っている。このような彼女にとって唯一の慰めは音楽である。“... the music was always in the background, like music at a church service; it was something to depend upon.” (139)と、この物語ではバックミュージックのように至る所で音楽への言及がある。ショッピングプラザで Arnold らしき少年を見かけたとき、Connie は “couldn’t help glancing” (121) とか “couldn’t help but look back” (121) となぜか分からないままに彼に惹かれるが、それも音楽のせいかもしれないという。

この作品が当時若者にとってカリスマ的存在であった Bob Dylan に捧げられていることは注目に値する。特に Connie の “It was all over” という言葉は彼の曲 “It’s All Over, Baby Blue” の歌詞と重なり、彼女の無意識の虚無感と訳の分からない苛立ち、そこから生じるすべてを無にしたいと思う破壊性が Dylanの曲への言及によって強調されている。Dylanもまた当時のアメリカ社会に苛立ちを感じていた一人であり、彼の歌詞にはそれが表現されているからである (Quirk 417)。

Arnold はこのような、Connieの説明のつかない感情を具現する「他者」である。日常生活では、彼女はそれを抑圧し内に押し込めている。Arnoldが “his whole face was a mask” (130) と仮面をかぶり、彼女と同じ年齢を装って若者らしい格好をしているが実は歳上であることや、時折苛立ちや凶暴性を見せるのはこのような「他者」性ゆえである。

Connieは、自己に内在する「他者」、すなわち無意識の衝動と闘っている。安河内英光は『60年代アメリカ小説論』の序文で、彼が取り上げた作家の「主人公達の自己は解体し浮遊し彷徨し、そして狂気へ走る」書いているが (7)、これはConnieにも当てはまる。Arnoldの登場で、恐怖の源泉と対面するConnieは、それまでの日常から突然恐怖に包まれた世界に入るが、そこから逃れる術を知らない。その結果、「死」に向かう志向を内包する。これこそ理性では説明のつかない人間心理の不可解さである。ゴシックは、何事も理性的に考えることが可能ですべて説明がつくと思っている現実社会にあっても、人間の



感情、幻想、恐怖は必ずしも説明がつくものではないことを、またたとえその探求が「死」を招くものであっても、それに向かう衝動を封じ込めるのは難しいことを伝えている。人間のこのような衝動は一見、理性でもって「意味づけ」できるように思われるが、実はその解釈を逃れるものである。Poe が、短編“The Black Cat”で、人間の「つむじ曲がり」(perverseness) (350) という説明のつかない感情を描いているように、Oatesもやはり人間の心に潜む複雑怪奇な衝動、死の志向という「他者」がこの物語の恐怖の源泉であるということ、思春期の少女の物語として象徴的に描いたのではないだろうか。理解しがたい衝動に駆られて少女たちは誘惑者についていったのである。Joyce M. Wegs が “. . . a transcendent reality . . . Full of puzzling and perverse longings, the heart persists in mixing lust and love, life and death, good and evil.” (87) といっているように、非理性的な「他者」が理性的な意識を支配してしまっている現実がこの作品の「ゴシック性」であると考えられる。

## おわりに

Connieや彼女の家族に代表される虚無感や絶望感、そこから生じる彼女のような自暴自棄な「死」の志向は、当時のアメリカ社会全般に共通するムードであったといえる。“Where Are You Going, Where Have You Been?” が発表され、またその舞台ともなっている1960年代のアメリカはまさに過渡期で、南北戦争以来「最も激しく揺れ動いた喧騒と動乱の時代」であった(安河内1)。社会的には公民権運動、フェミニズム運動、マイノリティ運動、ベトナム反戦運動、そしてカウンター・カルチャー運動などが続き、パクスアメリカーナを誇っていたアメリカ合衆国のこれまでの価値観が根底から崩され始めた時代である。1963年のケネディ大統領に続き、マーティン・ルーサー・キング牧師やロバート・ケネディなど人民を率いるリーダーが次々と暗殺されたのもこのときである。しかしながら、彼らに代わる魅力的なリーダーが出てきたわけでも、確固たる価値観が生まれてきたわけでもない。人々は何を頼りに、何を信じて生きていけばよいのか分からなくなっていた。見習うべき規範や人物の欠如は、アメリカ人全体を虚無的状态に陥れていた(ギトリン9-18, 安河内1-9)。

また1950年代のアメリカにみられる理想的な家族像が崩れ始めたのもこの時代である。1950年代のアメリカはまさに「家族主義の時代」で、ホワイトカラーのサラリーマンを夫とし、専業主婦の妻と明るく健康的な子供たち(3人程度)が郊外の一戸建ての家に住む中流家庭のイメージが定着していた。1950年代から1960年代にかけて10年近くも連続放映

された『パパは何でも知っている』『うちのママは世界一』『陽気なネルソン』などのテレビ番組がそれを物語っている。「1950年代に放送されたドラマのうち7割前後が家族もの、またそのうち6割以上が郊外に住む中流家庭のドラマだった」（小田他 873）といわれている。

ところが1960年代になると、Betty Friedan(1921-)の著書*The Feminine Mystique*(1963)をかきまわしに、それまで理想的な主婦像に抑圧されていた女性たちの不満が爆発する。その結果、女性解放運動の波が押し寄せ、アメリカの家庭の崩壊につながっていく。それ以降、アメリカでは離婚やシングルマザーの家庭が増え、家族のあり方はどんどん多様化する（小田他 873-81）。

このようなアメリカの社会環境をもこの作品は反映している。この短編を再収録したとき、Oatesがタイトルに*Stories of Young America*という副題をつけた事実がこのことを象徴的に物語っている。またQuirkがこの作品をアメリカン・ドリームが破れたアメリカの現状を突き付けているとみているのも理解できる（418）。このような拠り所のない社会に生きる人々が、Connieのように説明のつかない衝動に怯えるのも当然である。この意味においても、Oatesの作品は、様々な解釈を可能にする現代的テーマを含む物語であると同時に、人間の内的情念を悪魔的「他者」に具現させ、その犠牲者としての少女を描いている点で、まさに現代ゴシックの代表作といえるであろう。

### Works Cited

- ギトリン, トッド 『60年代アメリカ』 疋田三良, 向井俊二訳 彩流社 1999年。
- 神尾美津雄 『他者の登場』 近代文藝社 1994年。
- Martin, Robert K. "Introduction." *American Gothic: New Intervention in a National Narrative*.  
Ed. Robert K. Martin & Eric Savoy. Iowa City: U of Iowa P, 1998.
- Oates, Joyce Carol. *Where Are You Going, Where Have You Been?: Selected Early Stories*.  
Princeton: Ontario Review P, 1994.
- 小田隆裕 他編集 『現代のアメリカ』 大修館 2004年。
- Poe, Edgar Allan. *The Selected Writings of Edgar Allan Poe*. Ed. G. R. Thompson. New York:  
Norton, 2004.
- Quirk, Tom. "A Source for 'Where Are You Going, Where Have You Been?'" *Studies in Short  
Fiction* 18, i (1981): 413-19.
- Roberts, Marie Mulvey. *The Handbook to Gothic Literature*. Houndmills: Macmillan, 1998.

Joyce Carol Oates の “Where Are You Going, Where Have You Been?” Connie のゴシック的「他者」Arnold (神崎ゆかり)

(邦訳：『ゴシック入門：123の視点』ゴシックを読む会 英宝社 2006年)

Sullivan, Walter. “The Artificial Demon: Joyce Carol Oates and the Dimensions of the Real.”

*Critical Essays on Joyce Carol Oates*. Ed. Linda W. Wagner. Boston: G. K. Hall, 1979. 77-86.

Wegs, Joyce M. “Don’t You Know Who I Am?: The Grotesque in Oates’s ‘Where Are You Going, Where Have You Been?’” *Critical Essays on Joyce Carol Oates*. Ed. Linda W. Wagner. Boston: G. K. Hall, 1979. 87-92.

Weinberger, G. J. “Who Is Arnold Friend? The Other Self in Joyce Carol Oates’s ‘Where Are You Going, Where Have You Been?’” *American Imago* 45, ii (1998): 205-15.

Williams, Anne. *Art Of Darkness: A Poetics of Gothic*. Chicago: U of Chicago P, 1995.

安河内英光, 馬場弘利編『60年代アメリカ小説論』開文社 2001年。